慈光

第二十七巻　第四号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第三一〇号）

目次

一念横超……近角常観……(2)
降魔と成道……福島政雄……(7)
仏灯をかかげる……松本解雄……(12)
念仏詩抄……木村無相……(16)
生と死と……花田正夫……(18)

末灯鈔　第六条

なによりも、こぞ、ことし老少男女、おおくのひとびとの死にあいて候うらんことこそ、あわれに候へ。ただし生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしまして候うえは、おどろきおぼしめすべからず候

まず善信（親鸞）が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定のひとは、うたがいなければ、正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴無智の人もおわりもめでたく候え。

如来の御はからいにて往生するよし、ひとびとにもうされ候いける、すこしもたがわず候なり。としごろおのおのに申しそうらいしこと、たがわずこそ候え。かまえて学生沙汰させたまいそうらわで、往生をとげさせたまいそうろうべし。

故法然聖人は「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまいりたるを御覧じては、往生必定すべしとて笑ませたまいしをみまいらせそうらいき。文沙汰して、さかさかしきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしかにうけたまわりき。いまにいたるまで、おもいあわせられ候うなり。ひとびとにすかされさせたまわで、御信心たじろがせたまわずして、おのおの御往生候べきなり。

ただし、ひとにすかされさせたまい候わずとも、信心のさだまらぬ人は正定聚（しょうじょうじゅ）に住したまわずして、うかれたまいたる人なり。

乗信房にかように申し候ようを、ひとびとにも申され候うべし。あなかしこ、あなかしこ。

文応元年十一月十三日。善信八十八歳

乗信御房

（註）この御消息の正本は、坂東下野国おおうちの御荘高田にこれあるなりと云々。

この御文こそ聖人の御晩年の最後の御文なり。

一念横超

近角常観

無始以来我々の方に向けられてある絶対の如来の御恵みがいたりとどいて、我々の身心に満入して下さる端的を信仰の一念という。これを譬えると、全くの黒闇の中に忽然と東天に日が昇るなり、前念までの黒闇が消えて、世界ことごとく明らかになるのに等しい。

この信仰の実験を私は時としては、釈尊の成道になぞらえて話すこともあるが、厳密にいえば、大聖の実験とわが信仰の経験と対比するのは、他力信仰の上からは適当の所為ではない。仏は救いの親であり、我等は救われる子である。大聖は慈悲ばかりであり、我等は罪ばかりである。その罪の衆生の僅かばかりの経験を仏陀の大覚と引きあてるのは甚だ不遜である、恐れ入ったことである。

しかしながら大聖の此世一代の方面から云えば、釈尊の成道の光景も我等が信仰に入った状況も同じ趣きがあるということが出来る。釈尊の成道したまうや、八万四千の煩悩を退治して、八万四千の光明を放ちたまうことは、全く我等の心に弥陀の仏日があらわれたまい、わが信心が八万四千の光明中におさめられる光景と同様である、いな釈尊の此世の方面に比してもよい程の尊いことである。釈尊の成道の当時、百千の魔軍が退き去って、心中に大慈悲の光りが輝いて来て、三千世界を照らす仏陀となりたまうた。我等もまた如来の光明が届いて下さって、信心開発して、暗い胸が仏陀の恵みに解けてきた一念、夜明けしたところは云うべからざる大なる一念である。その一念については客観的に見ずに、深く各自の心中に味って見ねば解らぬ。

私の経験から云えば、左に求め、右に衝きあたり、少しも安心が無かったのが、後にとうとう仏の恵みの尊いことが頂かれて、一点ああ広大の慈悲がありがたいと気づいた瞬間、即ち一念である、これを親鸞聖人は信楽開発の時刻の極促（ごくそく）と云われている。この心中ありありとして一種云うべからざる念（こころ）が顕われて来るのを大無量寿経には「其名号を聞いて、信心歓喜ないし一念せん」と説いてある。かく信心開発の一念が開けて来たのである。ひとたび心中に親が解って見れば再び親を忘れんと

して忘れられぬ、無くしょうとしても無くすることはできぬ、実に金剛堅固の一念である。

他力信仰の上で、仏の広大な恵みの事というときは、仏のことのみに止まり、信心のことという時は、衆生の心のみと考えて、二者があい離れてはならぬ。現今の信仰問題にせよ、旧来の安心問題にせよ、仏を遠くに押しのけて置いて、客観的に仏はこの如きものである、いや仏はこの如きものではないという研究になったり、若しくは信仰の一念に、たのむ思いがあるとか、無いとかと、内心ばかりを考えて、かく思わねばならぬ、ああ思えねばいかぬと心をこねりまわすことになったりするのは、皆まだいたらぬものである。仏心がわが心中に明らかになってくる、その間題が肝心である。如来の本願というも、仏の名号というも、また招喚の勅命とか、光明とか、利他の願海とかいうたのは、皆絶対の仏陀の上であるが、それが心中に疑いなくなったのでなければならぬ。

近頃、心持にこう感ずるなどいうて、心持の如何に目をつけて居るのが間違いである。真実に仏陀の光明に気づいたのが一念で、そのつぎの一念がはや多念である。ここを和讃に「信心まことに得る人は、憶念の心常にして仏恩報ずるおもいあり」といわれている。一念開けてきた信心歓喜の心持は夜の明けた心持ちである。ここが注意せねばならぬ点である。観無量寿経には韋提希が獄中に苦しんだとき、釈尊の説法を聞いて廓然大悟して無生法忍を得たと説いてある。禅宗にも廓然大悟というからこの他力真宗とかの禅宗と廓然に異ることがないようだけれど、そうではない。他力信仰の上では一時的に気持がよくなった、それがよいではない。仏陀が心中にあらわれてきて、到底仏陀を疑うことが出来なくなるのが他力信仰であって、日出ずるとき暗が一時に去るように、仏がありがたいという時、心の暗が一時に晴れて、何ともいえぬ味が廓然大悟である、これが他力信仰の上で肝心である、これが仏教の真の真たるところである。

その一念が開けて来たからには、仏心と一体で、仏心がわが心に入ってしまっている、そして一念発起すれば、自然に多念に流れ出るのが当然のことである。信仰の一念がひとたび発起したからには永久に失うことなく、日に月に朝に晩に仏の広大の恵みが意識の上にあらわれてきて、口に称え身によろこぶばかりである。時間的に云えばそのようであるがさらにその心の内容から云えば、所謂「信心二心なきが故に一念という、これを一心と名づく」或は、専心とも深心とも、決定心とも、真心とも、淳心とも、大慶喜心とも名づくべきである。

このような一念があらわれてきて、頓に仏心と融和して

来れば、生死海を横ざまにとび超えてしまう。そもそも仏の偉大な心がわが心に到り届いた一念の信心を、さらにこまかく云うて見れば、仏の真実、仏の慈悲、仏の回向が我が心にあらわれて下されたのである。しかし愚禿悲歎述懐和讃に「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」というのは、わが自性の不実を懺悔されたので、仏心から顕われて来る真実心は、仏のたまものであるから歴々としてわが心にある。慈悲心も同様に、仏の慈悲がなみなみとしてわが心に一杯あふれてある。また仏の広大の力が我等の上に明らかに来て下さるのである。

聖人がこの事を甚だ力強く仰言って、即ち現生に十種の利益ありと示されたのである。第一に冥衆護持の益というは、仏心が頂けたものは信仰のために資格が上るから守るというて、信仰の効を述べられたのでなく、仏心が到来すれば多くの天、もろもろの神が守って下さるという感じが自然に心の上にあらわれて来るというのである。又実際にこのような事実があるということを示されたのである。その広大な仏の恵みがなみなみと心に満ち〳〵たものは、満足円満の徳がある、これを至徳具足の益と云い、仏陀をみとめるなり、内心の革命が出来るのを転悪成善の益と云い、弥陀仏のみ親に遇いたてまつるとき、その仏のうしろに従いたまう諸仏菩薩がことごとく守護称讃されること疑いないことを諸仏称讃の益、諸仏護念の益と云い、仏の恵みを頂いてみれば、いずれに向っても皆歓喜の因縁ならぬものはないのを心多歓喜の益と云い、常に仏陀御親の懐にある心地を心光照護の益と云い、従って歓喜の中心である仏陀に向って、常に恩恵の広大なことを感謝し、念々刻々その洪徳に報いる心が湧きおこるのを知恩報徳の益と云い、我等の自性から云えば、この肉体がとれて仏土にいたって仏陀となっての後に、初めて慈悲の心がおこるのはもとよりであるけれども、この世にあるうちにも自ら行うのではないけれども、仏力によって一挙一動、仏の慈悲を喜ばせて頂くとき、おのずから他もまた仏陀の慈悲を喜んでくれるようにもなる、これを常行大悲の益という。そこでこの肉体、皮を一つめくれば即ち仏陀である、故に入正定聚の益と名づけたのである。

日蝕の時、日と月がかさなってしまって、世界が暗くなる、しばらくして一点コロナの光が日輪の一方に出ると、やがて周囲に一時に光を発して、ぐっと明るくなるというが、今またこれと同じように仏陀の恵みがわが心に到って一念歓喜のコロナが出ると同時に急に胸中が明るくなってくる、このところに自然にこの現生に多くの利益が具わってある徳がみな心について来る。又願作仏心、度衆生心等のことも、わが上にみな我が心について来るのである。こ

の仏の心の満入することを円融とも云い、円満ともいう、これがまた実に頓極である、頓速である、仏陀の光りをみとめるとき極めてすみやかにその仏の恵みが我が心に入り来る、この一念の味が横超である。

そもそも横超というのは、竪出・横出・竪超・横超と相並んで、親鸞聖人が一代仏教を判釈するのに使われた名称である。竪というのは此人生にあって、此肉体のままで仏陀大覚の位に登る道である。横というのは此人生以外の極楽世界に生れて、かの国において仏陀と成る道である。もう一つ云えば、わが心以外に仏を見ず、われただちに仏なりと自覚自悟するのが竪の方である、向うに仏陀がましまして、我々がその仏陀によって救われるのが横の方である。我等は自分の煩悩を清めて、仏の位に登るという竪の道では到底駄目である。この身を捨てて仏陀の御許に往く横の道が我等に相応した法である。聖人の判釈は、仏説の順序から出たのでもなく、また法門の理屈から論じ出したものでもなく、全く聖人の実験的信仰の味である。この上に出というのは漸々に仏になるのを言うのであって、我々が修養の功を積んでそろそろと仏の位にいたるのは竪出である。他の仏を念じて漸々よくなって浄土に往生するのは横出である。我等の信仰は、この心これ仏とりきむのでないから竪ではない、向うから仏の恵みが照らして下さるから横である、故に横超という。竪超というのは、真言宗、禅宗等が盛んに凡夫地から一躍して仏地に到ると説いて、即心是仏、即身成仏を談じ、これは超ではあるが竪と云わねばならぬ。次に念仏の功を積み、漸々修行を重ねて往生するという方は、横であっても出と云わねばならぬ、今他力の信仰は、一念仏陀の光りを見るなり仏に成ると定まるから横超というのである。

世人がややもすれば、即心成仏の道は痛快であると考えて試みる者があるけれど、真面目に悟ることは実際には頗るむつかしいことである。又横の教えでも我々は仏を手本にし理想にしたり、又は仮説したりして修養的に行かんとする道も終には倒れざるを得ない道である。親鸞聖人の教えられたところは、一足飛びに横に超える道である。このような判釈は親鸞聖人の実験からきたものであって如何にも適切な判釈である。

私はかって、天台の五時八教などの判釈は頗る面白いが横竪超出の判釈はあまり感服の出来ぬまずいやり方であると思ったことがあるが、信仰の経験から見てくれば、これ程適切な判釈は他にはあるまいと鑽仰せずにはいられなくなった。繰り返して云うが、我々は自分で実行するには、竪の道は到底くわだて及ぶことは出来ぬ、横の道でも漸々に進んで行く方では、無限の距離があるから、仏の境界へ

行けるはずはない。無限の仏が無限の力をもって仏陀の境にひき入れて下さる願力摂取の法なればこそ行けるのである。修養的に漸々に進む方は、各自の器量が一様でないから、上中下の三輩とか、或は三々九品とか、種々無量に階級差別を生ずるは勿論である。全然利他仏力の救済に従う方では、信仰に浅深も無く、階級も差別も無い。信巻に

大願清浄の報土には品位階次を云わず、一念須臾（しゅゆ）の間に、速に疾く無上正真道を超証す。

と云われてある、ああ有り難いと親の恵みに気つく一念に親心が満ちて来たのである、信仰はこれより外にはない。如何に世間からは立派な人と云う者でも、われ孝を為せりと云うならば、真の孝子とは云えぬ、親を少しぐらいよくしても我れを生み育てて下された広大の恩に向えば一生を傾け尽しても、親の恩に報ずることが出来ぬ、如何に善を積めばとて、われこそ善を為せりなどと云わば、絶対の親に対し非常な傲慢の者である。

たとい聖道門の人でもわれ善を為せりと云うならば憍慢である、禅宗の悟りを得た人も、仏恩を喜ぶ感謝で行かねばならぬ、私共禅者の話を透して我が仏陀の慈悲を喜ぶことが出来る。若しわれこそ仏になると腰を据えた日にはきっと間違っている。「何處にか塵埃を惹（ひ）かん」というまでに悟ったならば、いよいよ法界の恵みに感謝せねばならぬ。そこで極端に云い放てば、この仏の恵み以外に仏教は無しと云うべきである。

それであるから善人悪人いずれも仏の恵みを見る時、みな同じことである、さらに違いはない。ランプが明るい、カンテラは暗い、電灯は何よりもズット明るいというてもそれは夜の間の比較である。東天に日が出る時は、最早皆同じである。信仰問題もこれと同じである、そのかわり暗中に居て明るい気持しているならばそれは夢中の昼であるから、目醒めた時は深い夜である、この無明の黒闇は、必ず仏陀の恵みの光によって照らし破らるべきものである。一切衆生悉有仏性というは、此点である、華厳経に説かれたる仏の真実はこの絶対の仏陀の真実である、涅槃経の如来の慈悲はこの絶対の如来の慈悲である、一切経は皆唯一仏陀の恵みを説けるものに外ならずして、一切衆生は皆平等に、この仏陀の恵みに入り同一の信仰をよろこぶべきである。他力の信心は善悪の凡夫ともに仏の方よりたまわる信心であるから、源空が信心も、善信房の信心もさらにかわるべからず唯一つなりと、師弟老少皆一味平等の信心である。これが一念横超と云わるる点である、その一念の信心がわれわれ罪悪の心にいたって下さる有様が涅槃の妙味である。

「親鸞聖人の信仰」第十章。

降魔と成道

福島政雄

降魔と成道という場面は、釈尊伝の中で最も興味深い場面である。降魔は煩悩の統一であり、成道は仏界の内観である、多くの仏伝が説く降魔の物語りは戦いの物語りであるが、それは両々相対陣して戦うというような戦争物語りではなく、悪魔は戦闘準備をして菩薩に向って押しよせるのに、菩薩は、静寂裡にこれと問答するばかりで、菩薩の態度はあくまでも消極的である、悪魔に対して武器を執って応戦しようとするような態度は微塵もない。しかも悪魔は敗れて退き、菩薩は静かに菩提樹下を勝利の座として仏陀の大覚に徹する。この菩薩の態度は努力奮闘というような態度ではなく、静観精進という態度である。

悪魔は自己自身に激して猛り狂う。菩薩は静かにその猛り狂う悪魔のすがたを観（かん）ずる。しかし外から迫ってくる悪魔は、実は菩薩の心中の悪魔である。菩薩には心中の苦悩が打ちつづくのである。この時悪魔は必ずしも悪魔のすがたをもって現われて来ない。

人生において悪魔が悪魔として見えるということは容易のことではない。煩悩は必ずしも煩悩として感ぜられない。いのちは輝き人生は希望に満ちると感じている、今菩薩がまさに成道しょうとする時においても、菩薩の過去の様々ないのちの姿があらわれてくる。染愛（ぜんあい）能悦人（のうえつにん）可愛楽（かあいらく）の三女というのも正に此のごときものであろう。三女が若い美しい女性の姿で現われているかぎりでは、煩悩魔が煩悩魔であるとは感ぜられない、それは可愛楽として感ぜられるのである。それは所謂天上の喜楽の心境である、感覚や本能の無自覚な享楽の状態である。その時においては此の世に悪魔は存在しない。女性はことごとく染愛であり、能悦人、可愛楽であり、男性はことごとく名誉や権勢や転輪聖王の憧憬者であり、刺戟者であり、同伴者である。

しかし今や降魔の場面では悪魔は悪魔を見たのである。人生は久しい以前から菩薩にとっては苦悩の道場であった。生命のすがたは煩悩魔の跳梁のすがたであり、この煩悩魔を避けるべきか、或はまたこれと戦うべきかは、菩薩

の数年にわたる問題であった。菩薩は先ずこれを避ける道をとった。太子の出城はすなわちこれである。しかもこれを避けて避けることが出来ず、これと戦ってこれを征服し得べきものでないということが、菩薩の体験上の結論である。しかし苦行林の修行によって、かっては悪魔でないと思った煩悩魔の正体をいよいよ明らかにすることができたのであろう。故に悪魔は今やその全相をもって、菩薩の眼前にあらわれてきたのである。

悪魔が大軍をもって金剛菩提樹下の菩薩の道場に押しよせてきたとき、諸天はおそれて姿を隠したという。これは非常に興味あることである。諸天の世界は喜楽の世界である。喜楽の対象は甘美なものであるが、甘美の一面は苦醜である。喜楽はそれが無自覚であればあるほど忽ち転じて苦悩となる。菩薩の心眼に悪魔が悪魔としてその正体をあらわすとき、喜楽は菩薩から去って行く。いなむしろ喜楽の諸天のすがたが忽ち転じて悪魔となるのである。

今や悪魔の世界は虚空から地上までひろがってきた。悪魔はその様々の醜い姿を菩薩の眼前にあらわした。その頭に大樹を載き、手に金杵（きんしょ）を執るものは、おもうに権勢と黄金との誘惑である。大腹長身なのは餓饑貪欲の姿である。長爪利牙（ちょうそうりが）なのは貪欲の積極的発動のすがたである。身体より烟焔を放つものは瞋恚の悪魔である。唇垂れて地にとどいているのはおもうに愚痴の相である。蛇を身にまとうものは拂っても拂っても去り難い執念の煩悩である。空中に施廻するものは空虚な概念思想の魔にとらわれたものである。

これらの悪魔が菩薩を囲繞して、或は菩薩の身を裂こうとし、或は四方に烟が起って炎は天を衝き、或は狂風が山谷を震動し、暗々として闇に一切が覆われ、四大海水は一時に湧沸し、悪魔の瞋恚はますます盛んになり、一切の毛孔からは血を流すようになったと、過去現在因果経に述べられているのは、そのまま菩薩の心中の描写であり、善悪美醜一切の上に煩悩の跳梁を観じられる菩薩の心境の直写である。

煩悩魔を観じられる菩薩は、やがて煩悩魔の統一に徹する。即ち煩悩を転じて菩提を成じられるのである。魔王は菩薩の心の寂然不動なのを見て心に慚愧し、憍慢を捨ててすなわち道にかえり、天宮にかえる。悪魔のすがたは去って天人の喜楽となる。喜楽がさきに転じて苦悩となったのであるが、その苦悩が転じてまた喜楽となる。そこで群る悪魔のこころがくだけてことごとく崩れ散ってしまい、また威武は失われて、諸の戦闘の道具が林や野に縦横に散乱し、やがて悪魔はことごとく転じて無上菩提の道の守護神となる。散乱した武器は再びとられて、道を守護する矛と

なり盾となるのである。

法隆寺の金堂に安置せられる四天王の像を仰ぐとき、吾人はこの天魔一如のすがたを見る。魔は服して四天王の足下にあるけれども、反抗の挙句に征服せられたという面貌はすこしもなく、温順な家畜のように四天王の足下にたわむれているおもむきがあり、これを鎌倉時代のものとくらべると雲泥の相違がある。四天王にもまた悪魔を克服したというような努力奪闘の面貌はない。降魔の趣きは正にこの様であったと思われる。力をもって服せられたのではなくて、魔の魔である所以の根本が転ぜられるのである。極言すれば、悪魔の力は転じて四天王の力となり、菩薩の力となるのである。

十二月八日、暁の明星のかがやく頃、大覚に徹したと伝えられる菩薩の成道の風光は、正にこのようであったと思われる。天に烟霧なく、風こずえを動かさず、虚空の諸天香しい妙花を雨ふらし、おおくの伎楽を奏して菩薩を供養したと伝えられる。妙花の雨ふるとは、適意柔軟の心があまねく大千世界をつつむ趣きである。

成道の仏陀はやがて一切衆生の心想に入る仏陀である。一切の世界を如実に知見する仏陀である。天眼（てんげん）を得て世間を観察し、無量の衆生を徹見すること明鏡の中に自身の面像を観るが如し、と伝えられるのがこれである。成道は如実相の知見であるから、地獄は地獄の如実の相を仏陀の前にあらわし、餓鬼、畜生はまたその如実の相を仏陀の前にあらわす。否、仏陀は地獄、餓鬼、畜生の貪欲、瞋恚、愚痴のすがたを自己の生命裡に摂してこれを知見し、これを根本的に融かしてしまわれるのである。それが仏陀にとってはよそごとでないのである。故に成道の仏陀は一切衆生、一切世間の苦悩を摂受して自己の苦悩とするのである。衆生はその仏陀の胸裡に安息の地を発見するのである。

衆生はどうして苦悩するのであろうか。自己を如実の自己以上に評価するところに苦悩がある。傲慢はこれから起り、瞋恚もそこに起る。愚痴のいのちがそうさせるのである。自己を如実の価値以上に評価する他人の前においては偽善が起り、価値以下に評価する他人の前にはひがみと瞋恚が起る。唯自己を自己のありのままに評価する親の前においては、安楽であり、落ちつくことができる。今仏陀の成道はこのような親の心を久遠のいのちにおいて開くのである。世界の衆生は成道の世界の前において、その貪・瞋・痴の如実相を摂受せられて、そのありのままを知見せられ、久遠の親のいのちの中に安住して、その貪・瞋・痴の煩悩を融化せられて行く。そこに仏陀の成道の久遠の意義があり、そこに衆生の永遠の帰依処があるのである。

仏陀の成道の内面的風光を更にくわしく説かれた十二因縁観は、そのままに衆生のすがたである。無明によって行あり、次に識あり、名色あり、六入処そこに生じ、触起り、愛動く。愛はそこに深刻なすがたで起り、取は有を生じ来る。生という現実はそこに成り立ち、老病死という悲痛はこれに続いてくる。根本の無明は三界に蠢動するいのちの盲目的な動きであり、老病死はむしろ衆生のしらぬまに厳然として動いて来るところの避けることの出来ない力あるもので、衆生はこれを自覚せずに蠢動しているから、仏陀の成道は、その衆生のすがたを、久遠劫かけて摂取して行かれる内面的意義を有するのである。

このようにして大覚の仏陀は、今や内面的に一切衆生と接触されるようになった。そこに仏陀の成道に即して久遠の黎明がある、それは暁の光りが永遠に続くのである。一切衆生の貪・瞋・痴の暗に、仏陀大覚の曙光が永劫かけて徹して来るのである。

大覚の仏陀は大覚に固定してはいられないで、永劫かけて大覚し来るものである。一切衆生の煩悩の暗が無限に続くのに即して、仏陀大覚の黎明が無限に続くのである。衆生の暗そのものを照射してそこに久遠の黎明を現ずるものである。その久遠の黎明の照射を受ける衆生は、自己の如実相に目がさめるのである。仏陀の大覚は衆生の自覚の力となり、衆生は自己の姿をそのままに見るにいたる。故に地獄の衆生は自己の瞋恚の如実相を自覚し、餓鬼の衆生は自己の貪欲の如実相を自覚し、畜生の衆生は自己の愚痴の如実相を自覚する。かくして一切衆生海は仏陀の根本大覚の光に照されてその如実相を現じ来るに及んで、三千大千世界は、仏陀の成道を讃美する響きに充満するのである。

仏陀の成道後、三七日の間、仏陀は法味を愛楽して菩提樹をめぐると伝えられている、それは一乗道の愛楽である。因果経に次のように説かれている。

我ここにありて一切の漏（ろ）を尽くし、なすべきところすでにおわり、本願成満して甚深の法を得、見難きをよく見、知り難きをよく知る。その義微妙にして、唯仏と仏とよくこれを知るのみ。もし他のために説くも彼は解する能わずんば、わが法むなしく授け、いたずらに自ら疲労してわが愁悩まさん。我ひとり寂静処において、わが所見の法、安楽の境界を思惟して住せんかな。

この時、大梵天王が勧請して、仏陀をして転法輪の第一程に入らしめるということである。即ち大覚の仏陀は決して説法をいそがれぬ。衆生の機縁の成熟を待って、その到来する時まではむしろ沈黙に住しようとされている、ここに華厳経のあらわれる契機がある。華厳経は仏陀の成道を主題として、大沈黙裡の大獅子吼を敍述されたものであ

る。そこに成道と教化との関係を徐々に述べられたものである。降魔成道の沈黙裡に一切衆生海は響応して来るのである、久遠の静寂裡に充実した生命こそは、やがて一切衆生の教化を永劫かけて果たし遂げて下さる大生命であるのである。

（昭和十年十二月七日稿了）

心光のあと

福島　政雄

昭和二十年歳晩所懐

国破れて淋しき年の暮ながら　なほたのまるる国民のちから

くに破れしなげきの底に復興の七千余万生きの力あり

昭和二十一年の歌

述　懐

柔軟のこころも出で来とのたまひし祖聖の御言しみじみとおもふ

広島の廃墟　（二月一日）

紙屋町の夕風寒し原子弾に焼けはてし街の廃墟はろけく

妻も子も焼け失せにきといふ人の悲しき胸のものがたりきく

春は過ぎ行く　（五月一日）

国破れて淋しさまさる此の春は花の蔭にも立たで過ぎけり

東京旅行の帰途　（九月四日）

国破れて旅行く身なり東海の空にそびゆる富士の淋しさ

（十月十七日）

綿雲の上にそびえ立つ大富士のみねほのしろく雪降りにけり

皇御国をおもえば悲し大富士の秋ぞらきよき姿仰げども

昭和二十二年の歌

東京よりの帰途

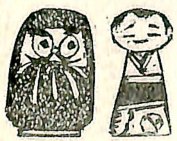
弥生なかば三島を出づる汽車の窓に玉とかがやく雪の富士のね

ふもとまで雪にかがやく富士のみねに一すぢの雲の立ちてなびくも

昭和二十三年の歌

榊谷信行君の宅にて

教の道研ぎて深めて日の本をいやまさる国になさむとぞおもふ



仏灯をかかげる

松本　解雄

蓮如上人を想う

「夫れ、秋も去り春も去りて年月を送ること昨日も過ぎ今日も過ぐ、いつの間にかは年老のつもるらんともおぼえず知らざりき」

これは、本願寺の中興の祖と云われる八代目の蓮如上人の晩年にものされた御文（御文章）四帖目第四通の冒頭のおことばでありますが、私も六十歳をすでに過ぎた今日、全く同様に感じます。ところが、次の

「しかるにそのうちにはさりとも或は花鳥風月の遊びにも交りつらん、また歓楽・苦痛の悲喜にも遇いはんべりつらんなれども、今にそれともおもい出すこととてひとつもなし」

になりますと、少々合点のいかないところがあります。それは上人が七十年の過去をふり返ってみて、いろいろな楽しみや悲しみに出あわれたこと、その点は何人も様相は異っていても、それぞれの思い出はあるはずでありますが、上人の場合「今にそれとも思い出すこととて一つもなし」と申されているのは、あの波乱にとんだ上人の御一生を思うにつけても、どうもぴったりしないのであります。それは太閤秀吉が、あの輝やかしい生涯を最後にふり返ったとき「浪花のことは夢のまた夢」と詠じた心境と同一のご心境を述べられたのでしょうか。あるいはまた、すみ切ったご信心のうえから「よろずのことみなもてそらごとたわごと」と実感されてのおことばでしょうか。どなたでもお教えをいただきたいと思います。

さて次の

「ただいたずらに明し、いたずらに暮して老の白髪となりはてぬる身のありさまこそ悲しけれ」

はどうでしょうか。というのは「ただいたずらに明し、いたずらに暮して老の白髪となりはてぬる身のありさま」については、私も年齢のへだたりから来る若干の割引はあるとしても、大体同じような感じはもっておりますが、私の場合、上人のようにはたして「かなしけれ」とすぎ去った過去を悲しんでいるかと、胸に手をあてて考えてみるのに

どうも悲しんでいるとは思われません。

このことは、親鸞聖人の「誠に知んぬ、悲しきかな愚禿鸞」とあり、また正像末和讃に「釈迦如来かくれましまして二千余年になりたまう、如来の遺弟悲泣せよ」とあり、さらに、愚禿悲歎述懐和讃にみられるような懺悔についても、同じようなことが言えるようであります。それだけ私の場合、現実をみることが皮相的なのかもしれません。文字通り「無慚無愧」なのでありましょう、おそろしいことです。

そこで上人は次に、電光朝露のはかないこの世にありながら、さいわいにも「今日までは無常のはげしき風にもさそわれずして」生を続けて来られたことに思いをいたし、そこにこそ如来との出会い、往生治定をよろこばれ「ありがたしというもなおおろかなり」と感恩報謝のお念仏に涙をながしていられます。そしてその感激の意を次の三首の歌に託して述べていられます。すなわち

ひとたびも仏をたのむこころこそ、まことの法にかなうみちなれ

つみぶかく如来をたのむ身になれば、法のちからに西へこそ行け

法を聞くみちに心のさだまれば、南無阿弥陀仏ととなえこそすれ

と。この三首の歌について、初めは「一念帰命の信心決定のすがた」を、二首目は「入正定聚の益、必至滅度のこころ」を、三首目は「慶喜金剛の信心の上には知恩報徳のこころ」を詠まれたと述べていられます。

私は今朝の勤行の際に、はからずもこの御文を拝読し、つね日ごろあまり触れえなかった蓮如上人の晩年のすみ切ったご心境と、深くそして生き生きとしたご信心のお味わいに、いまさらのように気づかされてこの拙文をつづったような次第であります。

最後に、上人が

「しかるに予すでに七旬の齢におよび、ことに愚闇無才の身として片腹いたくもかくの如く知らぬえせ法門を申すこと、且つはしんしゃくをもかえりみず、ただ本願ひとすじのとうとさばかりのあまり、卑劣のこの言の葉を筆にまかせて書きしるしおわりぬ。後に見ん人そしりをなさざれ、これまことに讃仏乗の縁、転法輪の因ともなりはんべりぬべし、あいかまえて偏執をなすことゆめゆめなかれ」

と結んでいられますが、ここまで読み来って、私が上人に対して、いままでいだいていたイメージとは大分趣きを異にするおすがたを拝したようで、もはや言うことばもなくただ合掌念仏するほかありませんでした。

昭和四十一年十二月四日

身辺あれこれ

人間六十の坂を越えると、いかにのん気にかまえていても、ときには「死」について思わずには居られない。ことに父に別れてすでに五十年をすぎ、その後母や兄弟五人とも別れてしまったいまは、人生無常というもなかなかおろかなりである。しかし、いまのところ私は健康で、血圧の心配もなく、食事も三度三度おいしく頂き、時に学生諸君と杯を交わし、談論風発、気炎をあげることもある。大学（愛媛）の用事も、文理学部の改組問題で数年来、改組委員に選ばれたりして時間をとられ、また補導委員を六年間も続けてやったので、二年前の寮問題などでエネルギーを消耗した。それに合唱団の顧問もしているので、合宿や演奏旅行、研究会などでかなりの時間をさかれ、肝心の研究の方は恥ずかしながら一向に進行しない。それでも最近数年間、日本宗教学会において、極めて粗雑ではあるが、浄土教、とくに親鸞教学について若干の試論を発表することができたのは全く健康の賜物と感謝している。

以上のような状態で日々を忙しく過ごしているので、平生は「死」についてなどあまり考えないのであるが、一人静かに過ごす時など、フト脳裏をかすめることもあるのである。「一体おまえは死についてどう考えるか」と問われたならば、どんなに答えるだろうか。前に現在の健康状態について述べたが、人は健康なときには死のことなどそんなに考えないのかも知れない。果してそうだとすれば、いまの状態で死を語ることは、何か本当のことでないものを頭だけで答えているようで、自己を欺くことにならないだろうかと思ったりする。とはいうものの一応答えなければならない。

私は今こそ病気もないし、いわゆる安閑としていられるのだが、いつ何時、心臓に故障ができて倒れるかもわからないし、また交通事故その他の不慮の災害に遇って死を迎えるかもしれない、そのことは現在でも覚悟している。「死の縁無量」であるから、人間どのような死に方をするか何人も予知することはできない。しかし真宗でいう「平生業成」であるから、平生のときに私の行き先はわかっているので心配はない。といってその場に臨んだら心乱れて「死にたくない、死にたくない」などわめきたてるかもしれない。人に向って「ゆきゆきて倒れ伏すとも萩の原」と曽良の句を引いてお話したりしながら、いざ自分のことになると、経典にあるように「是の人終らんとき心顛倒せず」というぐあいになるかどうか皆目わからないのである。全くえらそうなことは言えないのである。しかし「明日のことは思い煩ろうことなかれ」でそのところは、おまかせさせて頂いた身のしあわせで、何のことはないのである。未

来のことはともかくとして「日々是れ好日」の日暮らしをさせてもらい「ただ念仏」の世界に遊ばせて頂いている身の幸せを思うのである。

「罪業深重、煩悩熾盛」でありながら、それをそれとしらず、自分勝手に自己弁護をして大きな顔をしている自分、経典のことばをならべてみても、それは何か空々しい、よそごとのようなひびきしかもたない。ただその私に、ほのぼのとしたありがたさ「おかげさまで」との実感だけは自分の愚かしさを思えば思うほどしみじみと浮かんで来る。そんなようなわけで「死」の問題は、現在の私にとっては、ほんとうの意味では問題になってないようである。これが答えであると言えば答えである。

……さて来年三月、定年退職の暁には時間も十分できるので、研究の方も専念することができると思ったりしている。それでこれから将来に向かって何をなすべきかを考えてみる。退官後、どこに住むかもはっきりしていない、できれば京都辺に住みたいと思うのであるが、どうなるかわからない。それはともかくとして三つの願いがある。

一つは、年来書きのこしてきた雑文をまとめて出版すること、二つには、いままでのささやかな研究をさらに深めてゆくこと。この点は、あるいは未完成に終るかもしれないが、力のかぎり続けてゆきたいと思っている。そして多少でもこれからの仏教界に貢献できればと願っている。三つには、ご縁のある人々に一人でも多く会うことによっておん同行おん同朋の交わりを広めてゆきたいと願っている

昭和四十三年六月二十六日。

○　○

法勾経

華の部

華の香は風に逆って薫らず、栴檀も多摩羅も末利迦もまたしかり。しかるに善人の香は風に逆って薫ず、善士は一切の方に薫る。

大道に遺棄せられたる塵芥聚の中に、芳香悦意の蓮華生ずるごとく、是のごとく塵芥に等しき盲いたる凡夫の中に正自覚者の弟子は慧明を以てあらわる。

念仏詩抄

木村無相

事実

事実——
今ここに
こうして
生きているという
事実——
かけがいのない
事実——

この事実の
不思議に
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
そのままである
イザリはイザリ

立てはせぬ
和上仰せに
〃立とうと思うのも
マチガイ
立てると思うのも
マチガイ
そのままである〃

そのマチガイに
気がつかず
自力でおまいり
するつもり
自力の信では
まいられぬ
イザリはイザリ
そのままである

※和上＝禿顕誠和上

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

念仏詩

フッとひらめき
すぐ　スガタ消す
すぐ　メモしなけりゃ
すぐ　わすれちゃう
まことにこまる
念仏詩――

それでも
一番したいもの
ナムアミダブツの
念仏詩――
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

領解（りょうげ）

わたしの念仏詩
ソラゴト領解

その日その日の
ソラゴト領解

六字のほかに
領解なし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

満腹リン

お念仏詩　もろた
如来さんに　もろた
今日のお念仏詩
四ツ五ツ六ツ
こんなにもろて
よいものか

お念仏詩　もろて
今日はニッコニコ
お念仏詩　もろて
今日は満腹リン
ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

たとえボケでも

わたしは七十
だいぶんボケて
ものわすれする
だけでなく
ヒトのものでも
もってくる
だいぶおかしく
なってきた
なにかにつけて
しょうねがない

和上お歌に
〃宿業で
たとえボケても
狂うても
たがえたまわぬ
弥陀の約束〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

＊和上＝禿頭誠和上

雪がふるふる

雪がふるふる
雪がふる
雪みてあれば
雪がふる
大悲無倦と
雪がふる
煩悩無尽と
雪がふる

雪がふるふる
雪がふる
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

○　○

かすみ立つ　春の山寺遠けれど
吹き来る風は　花の香ぞする
（作者不知）

生と死と

花田正夫

一、信仰と人生

近角先生は「絵を画くにはカンバスが要るし、字を書くには紙が要る。そのように信仰問題も人生問題を紙とし、カンバスとしてそこにあらわれねばならぬ」と強く主張されている。人生問題を紙としない信仰は水に画く絵、空に書く字で、観念の空転に終り無力であるが、反対に人生問題のみに終れば、光の無い泥海ののたうちのはてしのない連続におちる。

さて、この人生問題を、善悪の問題と生死の問題に大別することが出来るが、善悪の問題はついには「悪」の壁につきあたり、生死の問題は「死」の崖に臨まねばならぬ。悪と死、そこに生きることも死ぬことも出来ない大難関、大暗黒に遭遇する。

ここに、人それぞれの道があって一口には云われぬが、或人は生死無常が問題となって如来常住の大悲を頂いて、やがて善悪の問題に処して行く道を獲る。或人は善悪の罪障が問題となり、苦悩の末に如来の慈光に摂められて、生死の闇をひらかれる人もある。いずれにしても信仰は人生問題の全体を満たして下さるので、善悪の問題は解けたが、生死の問題はとけぬというのも不徹底であるし、生死の問題は安心しているが、善悪の問題は手がつかないというのも不充分である。

二、生死の問題

生のあるところ死の黒い影がつきまとうているが、私共は、生のみを重視して、死を軽視または無視しょうとしている。然し死の影は時に濃く時に薄く見えるが、消すことは出来ない。

ツルゲネフの「老婆」と云う詩に、要約すると

「私は一人で、曠野の道を歩いていた。すると不意に、かすかな抜足の気配がうしろにした。誰やら後をつけて来る。振り返ると醜い皺だらけで歯は一本もない老婆がいた。何を話しかけても黙って答えない、急ぐと老婆も急ぎ、止ると足音も止る。……。

しかし私は歩み続けた……その時不意に、何かしら穴のような影が行方に黒々とひろがった。〃墓だ！　私の墓だ！〃ののがれられない」

とある。又、「明日は、明日こそは」という詩に

「暮れ行く一日一日の何と空しく味気なく、甲斐ないものに見えることぞ。その残す跡形の何と乏しく、その一刻一刻の何と愚かしく無意味に流れ過ぎたことぞ。でもなお人は生きたいと望む。……ああ人は、どんな幸を未来に期待するのであるか。

一体なぜ人間は来るべき日々に、今しがた暮れたこの日に似ぬものの姿を、思い描こうとするのだろうか。〃明日は、明日こそは！〃と、人は己を慰め、その明日が彼を墓場に送りこむその日までこれを続ける」

釈尊は、老・病・死を見て、若き日の誇りをすてて、誰一人として逃れられぬ苦悩からの解脱の道を求められ、やがて三十五の十二月八日、降魔成道の暁を迎えられたのである。しかし私共愚人は、身辺に頻発する無常にあいながらも、性こりもなくそれをひとごととして、明日への幻影を追うて、幻滅の悲哀をくりかえしている。

私の六高時代からの法友の北岡行男兄は、永い年月池山先生に導かれて歎異抄を読み続けていたが、もう一つというところが解けず、これも無常をつきとめないからだと思い、医を開業しながら病人と接しても自分の死は感じられないと歎いていた。ところが今度の太平洋戦争で軍医として従軍した時、今度こそは死に直面出来るだろうと思って出かけたが、危険な時はビクッとするが、喉元をすぎるとケロッとなってしまう、幸に無事に帰還出来たものの、こんな鈍感な奴は自分では始末がつかない。池山先生は出征中にもうお亡くなりになっているので、先生追慕の一道会に来たと云って

紅葉せず　このまま散るか　散りゆくか

と一句を出して心境を訴えられたことがある。文字通り私共もこの通りで、波岡茂輝氏の歌に

何というぐうたらのわれぞ死にのはてまで、このままで動かざる気か

と詠じられているのも、愚鈍な私共の極限を吐露していられる、そこにさしのべられた手、よい御縁に恵まれないと浮かぶ瀬はないのである。

三、親しい者の死

幼い時、私の妹があやまって池におちて死んだ。その死体にふれた時、氷のような冷たさに思わず手をひっこめたが、これが私の死に触れはじめである。次に、春に二十の兄を失い、秋に二十八の姉を亡くして、自分も死ぬるんだなあ！と思い始めた。更に医大に入った四月一日に父が肋

膜炎が化膿して亡くなった。日々に衰弱し、病苦と心苦にあえぐ枕頭にあって、どうすることも出来ず、遂には看護する自分自身がたまらなくなった時、歎異抄の四章の

「聖道の慈悲というは、ものをあわれみかなしみはぐくむなり。しかれども思うがごとくたすけとぐることきわめてありがたし……今生にいかにいとおしふびんと思うとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし」

とある聖人の仰せが私のためにあることに気づき、念仏を申し〳〵最後まで看護させて貰った。

最後に、岡山医大の三年の頃、同窓のS君が最後の病床で、親と教授方に礼を云ったあと、私共友人に向って

「医師になって病人をたすけようと願ってきたが、自分が死ぬとは知らなかつた！」

と語った時、誰も言葉を失ってしまった。

又、これは忘れ得ないことの一つであるが、高知の営林局に兄が勤めていた頃、学校の休みに出掛けた時、或夕方市内を流れる鏡川の堤を散歩していると、その河原に並んだ掘っ立て小屋の一つにハンセン氏病の患者が夕餉の仕度をしていたので近寄って

「あなたの病は今の医学（昭和の始め）ではどうすることも出来ない、いつか療法も見つかるでしょうが、今のあなたには何の力にもなりません。せめて今日までに、私共が想像も出来ぬ苦悩を越えて来られたことでしょうが、どうかそれをすこし聞かせて下さい」

と云うと、近寄ってはいけません、離れて聞いて下さいと前置きして

「私は山口県の者です。この病になって屋根裏にこもって数年療養しましたが、段々悪くなるばかりで、父に、私は何の望みもありません、早く殺して下さいとたのみましたが、それは出来ぬ、どうか生きてくれと拝まれて、過しました。そのうちに、四国の八十八ケ所の巡礼に出るからといって家を出て、四国への連絡船で海に飛びこみましたが、折悪しく近くにいた漁師さんにたすけられました。そこで巡礼をはじめて室戸岬から再び海に身を投げましたが、今度は附近にいた子供に見つけられ、また救いあげられました。

これによりまして、今までは死のうと思えば何時でも死ねると思っていましたのは間違いで、私の業がつきるまでは死のうと思っても死ねないとわかりましてから、こんな膿血の出る身体で皆様に迷惑かけながら生かして貰っております云々」

と聞かされた。私はすこしばかり小銭を出して、何かのお足しに云うと、病人の出すお金は受取って貰えません、また要れば国元から送ってくれますが、私には無用です、と

のことであった。

この人を前にして、黙って頭を下げるばかりであった。

以上のことを通して、無常が無常と思えぬ私に、この人達は、自分の死と病を示して、私自身の無常を教えてくれました。又、人間の力の限界、人間が人間をどうすることも出来ないことを教えられ、いやが応でも自分自身が沈まぬ船、不滅の燈火を頂かねばならぬと知らされた。

四、自分自身の死

別府の眼科医で妙好人と云われた安波勲八氏の述懐に

「不思議な御縁から近角先生や東陽和上のお育てをうけて、自分のような愚人悪人をどこどこまでもお見捨てのない仏様の慈悲を喜ばせて頂く身になったが、自分の死については、頭でわかっても実感として味えないで長年すごし、そのために東陽和上や篤信の同行に御心配をかけた。ところが、はからずも妹の病がすすみ、たすからぬとなった時、母と姉から、どうせ助からぬのだから、仏様のお慈悲を話してやってくれ、とたのまれた。しかし自分に自信がないので話せないままに死別した。これが機縁となって、自分の死が問題となって、そのことを信仰坐談会で和才誠司さんに訴えたところ、〃別に病人にたすからぬと云って驚かさなくても、このしてみようのない奴をお見捨てない仏のましますことを話せばよいでは、ないか、このお見捨てのないお方に導かれて浄土に帰らせて頂けるのだから〃と教えられ、はじめて、永年の疑問が解けた。その後年ならず自分が胃ガンで手術不能と九大医学部で診断され、一時はビクビクしたが、このビクつく奴をかねてしろしめす大悲にひきもどされ、体力の続く限り診療を続け、縁あれば仏徳を讃えながら終らせて頂きます云々」

とあるが、私自身、二十四の秋、仏心の片鱗を知らせて頂き、その後長い年月、念仏を申し種々の方に育てられたけれど、死が自分の問題にならなかった。そうした間に親しい人々の死別にあって、ひとごとでないぞ、ひとごとでないぞとつぶやきながらも空しくすぎた。

ところが三十五の秋、肺浸潤で高熱が続き二ケ年静養したが、その時は、病気を他人事と思い、自分の身体は鉄筋コンクリートのようにおもっていた思いは崩れたけれど、何とかうまく治したいとそのことにかかりはてた。

次に終戦後、四十七の時過労がもとで心臓筋肉障害から狭心症の発作をくりかえし、名大に入院したけれど、ヒビの入った茶碗も大切にすれば長持ちする、無理をせずに、一病長寿の諺もあるから用心するようにと云われ、外に出る仕事を一切断って、小屋に静居、読書と原稿書きをしながら「病上手で死に下手」と人にも云われて十数年をへました。

六十五の時、突然血尿が多量に出、検診で膀胱の腫瘍とのことで、老病の壁につきあたり、入院して種々な手当をうけ、幸に今日まで時々の検診と施療で生かせて貰っているが、この病気が突然、腫瘍の破裂による出血という形で出て来た時、どうしたことか、病室にあって、はじめて死の壁に直面させられた。そこに孤独と無力の暗い海があるばかりで、人々の親切な声や手も、遠くの浜辺に掲げる灯火と呼声で、自分は艫も舵も失って暗夜の嵐の海にただよう孤舟の身と知らされた時、歎異抄の九章の後半が異様な感動と力をもって私の胸にくりかえされた。

「いそぎ浄土に参りたき心のなくて、いささか所労（やまい）のこともあれば死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩悩の所為なり」

これはすでに度々うなずかされた、誰しも同じ経験をくりかえすけれど、次の仰せ

「久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすて難く、いまだ生れざる安養の浄土はこいしからず候ことまことによくよく煩悩の興盛に候にこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力なくしておわる時かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを、ことに憐みたまうなり。これにつけてこそ大悲大願はいよいよたのもしく往生は決定と存じ候え云々」

一言一句が血となり肉となってしみこみ、自然に、この孤独と無力の身をかねてしろしめして、ことに憐んで下さる大悲一つのたのもしさを仰ぎ、念仏が口をついてあふれて出た。その念仏の中に

「死もまた我なり！」

と独語し、自分ながら驚いた。一番いやな、地上の一切が色あせて光を失う死を、我として受け取らして貰えたのも、如何なる死に様をしょうともお見捨てのない大悲大願のたのもしさのおかげであった。恰も犬に吠えつかれて怖れ泣く児も、母親に抱きあげられると、今までこわかった犬も恐ろしくなくなるにもたとえられよう。蓮如上人の御歌

一人でも行かねばならぬ旅なるを　弥陀にひかれて行くぞうれしき

も同時に心に浮かんで、大いにうなづかされた。

五、死の彼方

浅原才市のうたに

才市、六十五になるよ
いまの世のひぐれは
さきの世のよあけ
ご恩うれしや
なむあみだぶつ

とあるが、名古屋で処刑された可説居士も、いよいよお

別れの時、

「ながながお世話になりました。
私は死ぬるのではありません。
新しい生への出発です。」

と教誨師さんに云い残して逝った。

白道の彼方は知る由もないが、今現に何処々々までもお見捨てない仏力に抱かれて救われている以上、明日の心配は無用である。

臼杵祖山老師が、直腸ガンの診断をうけられた日、

覚悟だに要なきまでにみほとけの　育てたまいし恵み

とうとし

と讃仰していられる。又親鸞聖人の八十八才の十一月の御書、末灯抄の第六号に、

「……まず善信が身には臨終の善悪をば申さず。信心決定の人は疑いなければ正定聚に住することにて候うなり。さればこそ愚痴、無智の人も終りもめでたく候え。如来の御はからいにて往生するよし、人々に申され候いけるすこしも違わず候なり。としごろ各々に申し候いしことたがわずこそ候え云々」

との御臨末の近い日のお言葉も同じ味わいである。かばたの源通寺、禿老院も

宿業でたとえぼけても狂うてもたがえたわまぬ弥陀の約束

と、随喜していられる。

よき人の仰せをきき、よき人々に護られて、浄土への新生が祝福せられるのである。

○

歎異抄の第四章に、人間の慈悲の末通らぬことを説かれて、そうしたどうしょうもない私共をことに憐まれて「念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもておもうがごとく衆生を利益する」道を示されている。

又第五章に、父母への孝養（きょうよう）の出来ない、御恩のかえしようもない私共に「いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも、神通方便をもて、まず有縁を度すべきなり」と、往生成仏の暁に無量無辺の大活動をさせて頂けることを仏力によって与えられると、知らされるのである。

これあってこそ、現在安心して、無理なくその分に応じてなすべきことを、あせらず、りきまず念仏裡にさせて頂けるのである。

昭和五十年春彼岸の中日。

あとがき

今日彼岸の中日でありますが、三十年前の春の彼岸には名古屋市の大空襲で、さしも広い名古屋も焼土と化し、当日、東別院の本堂が目立って大きな焔と煙をあげて燃え、その煙の雲の上をB29が、次から次へと姿を現わして南に去って行った様子は、私共の眼底に強く刻まれております。家を焼かれ家族を亡くし、或は負傷した子を抱いて右往左往した悲惨事が、先日もテレビで紹介されました。それにつけても、目下ベトナムやカンボジヤの戦争のニュースが報道されるにつけ、身にしみてそのいたましさを感じるのであります。聖徳太子が「和を以て貴しとなす」と大きく高く国是を掲げて下さり、徒党相争うて我是他非の主張の末は力と力との戦いになる現実を直視されて、仏心のまことに帰れ、この絶対のまことによらねば、枉（まが）れる身の救いは無いぞ！と御身にかけてのお導びきをいよいよ渇仰されるのであります。

あつさ寒さも彼岸までと云って、この時ばかりは、寺に参り、仏前に手を合せ、彼岸だんごをお供えして平和にやすらかにすごしてきた日本でありますが、この形式の根源にかえって、仏法を心のともしびとした生活の新出発とさせて頂きたいものであります。

近角先生の一念横超は、仏心のまことの徹到によって心の闇のひらけることを御体験の上で講じて下さいました。

福島先生の降魔と成道は、昭和二十八年発行の「こころ」から頂きました。サタンよ退け！というような神と悪魔のたたかいでなくて、仏陀の智慧と慈悲の心光裡に一切の煩悩魔がおのずからまつろうて来る妙境をお知らせ下さったものであります。英国の歴史家のトインビーが仏法の中に真実の平和のひらけることをたたえ、仏法者の興法への精進を切望しているのも、こうしたところに着眼しての上でありましょう。

松本様の内心に焔々として燃えた「仏法ひろまれ」の念願の一端を、仏灯をかかげるという一冊に発表せられました中から頂きました。春にさきがけて浄土におかえりになった今、御徳を慕う心から掲げさせて頂きました。世の常の書のように自分を世に出そうとされたのでなく、仏法の世に輝けかしの念願の吐露であります。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半一道会例会。
市バス、新郊通り一丁目下車、東へ三筋目、左入ル二軒目。
地下鉄、新端橋終点下車。
名鉄、呼続下車。

○ 毎月二十四日、午前午后、教西寺法話会。
昭和区小桜町二ノ四。市バス御器所通り下車。又は、市バス、北山下車。

定価　半年　五〇〇円（送共）
一年　一〇〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七